

1. 単元名 人間とは ～文章に表れた筆者の人間観を捉え、自分の人間観を構築する～ (6時間)

2. 単元の概要

本単元は、「文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと」(第3学年「C読むこと」エ)へ重点を置き、生徒の実態に沿って具現化したものである。

本学級の生徒は、生徒教研式標準学力検査 NRT の中領域別診断において個人の正答率を見ると、説明的文章を読むことに「指導を要する」とされた生徒は多く、全体として苦手意識を持っていると判断できる。さらに小問別の正答と誤答の数を見ると、「叙述に即した読み取り」と「詳細の読み取り」ではいずれも41%の誤答があり、課題であった。また、本校で実施している実力テストの解答内容を見ると、文章の論旨をつかむことができたとしても、文章の過程には書き手の意図や立場が表れているということに対する意識が足りなかった。そこから、情報を鵜呑みにする傾向が生まれており、情報の出どころやその確かさを疑わずに、自分の意見を支える根拠とする場面が少なくない。本校の生徒たちは、中学校生活のまとめとして、卒業論文を執筆する。その際、信頼性や正確性など様々な観点を持ちながら情報を読み、そのうえで文章に表れたものの見方や感じ方について、自分のものの見方や感じ方と照らし合わせて必要な情報を得ていくことが求められる。

以上のような現状を踏まえ、一度立ち止まって文章や情報の信憑性を疑ってみるという批判的な読み方をさせたいと考え、本単元では、「作られた『物語』を超えて」を教材とした。この文章は、霊長類学者の山極寿一が、ゴリラの例を出しながら、自分勝手に独りよがりな解釈を避けて常識とされていることに対する疑いの目をもつよう提言しているものである。この教材を用いて、具体的には、論説文に表れた筆者の人間観を評価することを通して、自分の人間観を構築するためのふさわしい根拠であるか立場を明確にして判断できる姿を目指す。

そこで本単元では「『人間とは』というテーマで小論文を書く」という言語活動を設定した。3年間の説明的文章の読みの集大成として、文章に表れたものの見方や考え方を評価したうえで自分の考えを形成することを目指す。内容や構造を的確に理解することが必要となる。今回の、「的確に理解する」とは、筆者の立場と根拠を明確にすることだと授業者は捉える。そこで、本教材を筆者の「人間観」という切り口から読んでいったときに、筆者の見方を読者として客観的にとらえることと、それを踏まえた読者への投げかけをとらえることが可能であると考えた。そのうえで、教材以外の論説文からも人間観にかかわる情報をさらに集めて、考えを形成させた。論旨を読み込み、生徒自身の主張をする際に、効果的にはたらくかどうかを考えさせた。自分を取り巻く人間や自然、社会などについて思いを巡らせ自分の考えを持てること、そしてそのために、他者との交流や読書などを通じて信憑性のある情報を収集できる力を付けていくことを念頭に置きながら指導した。本単元を終えてからも、批判的な読み方をする、つまり妥当性を判断しながら文章を読んでいく生徒になることを期待する。

単元の評価規準を、以下のように設定した。

【関】国語への関心・意欲・態度	【読】読む能力	【言】言語についての知識・理解・技能
論説文を読み、そこに表れた筆者のものの見方や考え方を評価して、自分の考えを深めようとしている。	文章に表れている筆者の人間観をとらえ、自分の立場や根拠を明確にして人間についての意見を持っている。(エ)	語句の文脈上の意味を捉え、それが文章の中で果たしている役割を考えながら読んでいる。 (1)イ(イ))

また、指導と評価の計画は以下の通りである。

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1・2	○自分の人間観を定義付ける。 ○「作られた『物語』を超えて」を通読し、内容の概要をつかむ。	○哲学的内容についての考えを定義付けさせることで、立場や根拠を明確にする必然性を感じさせる。 ○論の展開や内容の概要を捉えるために、既習の読む能力を想起させる。	
3 (本時)	○文章に表れた人間観を捉え、自分の考えをもつ。	○筆者の人間観と意見を的確に理解させるために、自分の小論文に情報として取り入れるか判断させる。	[読む能力] ① ・話合いの様子の観察 ・ワークシートの記述内容
4	○様々な論説文から人間観を捉える。	○筆者のもつ人間観とはなにかという観点で様々な論説文を読ませる。その際、主張と根拠の整合性や情報の信憑性を確認させる。	[読む能力] ① ・ワークシートの記述内容
5・6	○「人間とは」というテーマで討論し、最終的な自分の意見をもつ。 ○自分の意見を小論文に表す。	○複数の情報の中で人間観について考えさせるため、討論形式の話合いを行わせる。 ○論文の形式や論じ方の型を示し、自分の人間観が形成されるまでの立場と根拠を明確にさせる。	[国語への関心・意欲・態度] ① ・話合いの様子の観察 [読む能力] ① ・小論文の記述内容

3. 指導にあたって

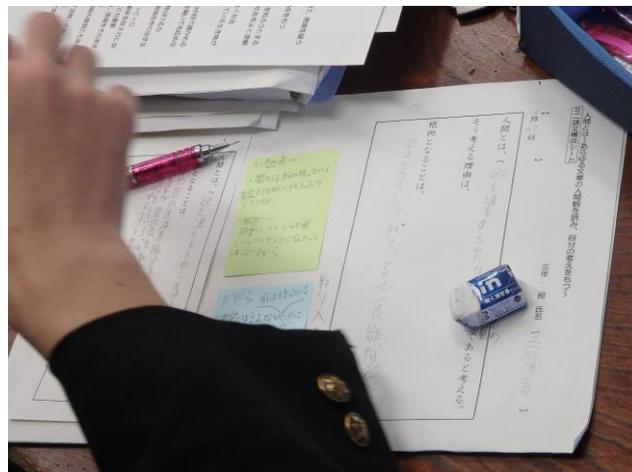
(1) 本単元で目指す生徒像

論説文からの的確に解釈して読み取ったことを情報とし、自分の知識・体験を照らし合わせて、哲学的命題の根拠として、その信頼性や妥当性を吟味している姿。

(2) 重視した資質・能力と発揮させるための手立て

生徒が主体的に学習活動へ向かえるようにするためには、自分の考え方に「本当にこの考えで正しいか」という自問を繰り返させる工夫が必要であると考えた。そこで、本時では、自分の人間観に関する論文の情報として、「作られた『物語』を超えて」に表れた筆者の人間観を取り入れるかの判断をさせる。判断をするために、まずは的確に論旨の読み取りをしているかを確認したのち、自分の人間観とその根拠、筆者の人間観とその根拠を比較させる。このことによって、筆者の人間観やそれを支える根拠につ

<p>3 取り入れるかどうかの最終的な意見をもつ。 【個】</p>	<p>○本時の思考や考えの変容がわかるように、第二次の「人間」の定義づけと、山極寿一の情報を取り入れるかの判断とその理由を小論文構成シートに記述させる。</p>	<p>「十分満足できる」状況(A)と判断して評価する。</p>
---------------------------------------	--	---------------------------------



5. 授業を終えて—考察—

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

○説明的文章を読むにあたり、「人間に対する見方」という視点を持って読むことは、生徒にとって読む動機となり、内容の解釈だけでなく何を読み取ればよいか明確であった。本指導の「人間に対する見方」のように、同じ視点で他の説明的文章を読んだときに、様々な著者の見方や考え方が比較でき、自分の見方や考え方を構築することができることを実感した生徒が多かった。

▲筆者の人間観を読み取るのに、教科書本文を根拠にしている生徒が少なく、指示を明確にしたり単元構想を工夫したりするべきであった。指導事項読むことでは、ある文章を批判的に読むことで自身の考えを持つことであり、本単元の中で批判的に読む活動は感じられなかった。本時においても、授業者が期待していた、情報の信頼性や妥当性を吟味している姿は概ね見られず、論の展開を丁寧に追ったり、抽象的な語句の意味合いを確認したりと、この教材の中で読みの力に特化することが深まりを生んだと考えられる。

▲比較する対象が、教科書教材、関連する書籍、自分の考え方、友達の考え方など複数に渡ることによって、教科書教材については、それを読むというよりも自分の考え方を構築するひとつのツールとしかならなかった。それによって、教科書教材を読まずに（考え方の構築の参考とせず）論文まで行きついた生徒もいたため、主となる学習活動が書く領域となってしまった。言語活動と指導事項が本当に合致しているか課題設定を検討する必要があった。

▲本時の中で学びを自覚できるように、前時までの自分の人間観と、交流後の自分の人間観の変容がわかるように1枚のワークシートを用いた。命題の答え（自分の考え）の変遷よりも、なぜそのように変わったのか、どう読んだから変容したのかなどの読みの自覚を促すワークシートや振り返りができる仕組みを工夫するべきであった。